

なければならぬと思ひます。

然るに在來の研究は以上の通りであり又材料が充分でないのであります。この理由により私共は此處に不完全な材料に基きましてこの不整頓な話をしましたのはこの研究の大成を熱望するからであります。切に皆様がこの研究に興味を持たれ此の研究上に貢獻せらるゝ事を希望いたします。

「日本人は如何してコンナ高尚な技術と趣味を心得て居るだらう。日本人は實に美術的國民である。かゝる美術的國民が何故にかゝる慘劇を敢てせんとするか。戦争などいふものは、ロシア人やトルコ人のやうに、戦争の好きな國民に一任して置けば好いに」ロシア人が云つたさうだが、これは味のある言葉と思ふ。露兵が日本兵の頭を刎れてやらうと勢こんで打つてよこした砲彈の生暖かき殻を拾つて草花をさして陣頭の伴侶とした將軍もあれば、血のやうに紅い撫子を胸に挿んで彈丸を撃つて居た勇士も日本軍隊にはあつた。春花の如き優しき情の内に、秋霜の如き凜々たる氣概を有するは日本人の特性ではないか？ 背囊に枕して蟲聲を聞き、銃火の中に立ちて、仰いて明月を賞するの士が、一度立つて怒號すれば獅子の狂ふが如きは、日本武士の態度ではないか？ 簡明直截、變骨の我等軍人も生死の間に在りて、なほ一片風流の雅懷を抱いて居る。——銃後

研究

◎シヨツベンハウエルの女子に就いての論文と、ラスキンの「セサム、アンド、リリス」中のリリス、オフ、クウインズ、ガーデンス」とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ (承前)

賛助員 千葉安良

- (一) 兩性論の範圍に入るべき諸問題
- 2、男女の差異

嚴格に研究論證する場合には、此の男女の差異と云ふことは、(イ)男子と女子との精神的方面の差異と、(四)身体的方面の差異と、(ハ)その兩方面の總和よりする人生經營者としての差異とに分つて、生理學と心理學と教育學との部門内に行いてせられねばならぬのであるが兩氏

の論説はもとよりしかく學術的にせられて居るのではない。云はゞ此のハの部に入るべき思想が散見するのみである。それ故私も批評の客体の示す所に従つて思考して行くのである。

- (一) 女子の生涯は根本的に男子よりも幸なりとか不幸なりとか云ふことなく、男子の生涯よりもつと静かにもつとおとなしくまたもつと控へ目がちに流れて行くべきものである。
- (二) 性に關する事柄は個人に關する事柄よりもつと厳しく女子には、とり扱はれて居るこれは彼等の全存在と性格とに、或る輕々な性質と、又男子とは全く異つた心の傾向とを與へる。



(三) 自然が人を二つに分けた時に、彼女は正確に中央から兩分しなかつた。積極と消極との差はたゞ質において許りでなく量においてもある。

以上の説は明白に 1、女子の生涯即女子の踏むべき人生は男子のそれに比して凡ての點において穩かであるべきこと、2、女子は心身ともに性に關する事柄に激しく左右せらるるものであること。3、凡ての點において女子は男子よりも劣つて居る。性情活動が消極的である許りでなく、活動の總量も亦少い。要するに、女は力の少い劣等の存在物である。と云ふことを聲言したのである。

ラ氏のは

(一) 男女兩性は何れが勝れて居るか云ふことを兩者を全然同一の立場に於いて、同一種のことであるかの如くにして比較するのは實に愚なことである。又女子の使命やその權利は男子のそれとは、全然別々のものであるかの如くに云はれたり、女子と男子とは種類階級の異つたものであつて、相互の間には到底調和しがたい要

求の存して居るやうに云はれたりするのは、少くとも誤謬である。更に又女子をその良人の影像若くは扈從者の如く見做し、女子は男子に對して、無思慮に隷屬的に服従すべきであつて、女子は纖弱なものであるから、男子の優秀なる剛勇によつて全く支持せらるべしと云ふのは馬鹿氣た考である。

(二) 男子の精力は發動的、前進的、防禦的である。男子は勝れたる爲す人である。創造者發見者、防禦者である。男子の智力は沈思と發明とに長じ、その勢力は冒險戰鬥に適して居る。之に反して、女子の力は整頓支配に長じて居て、戰鬥の爲めなくよい整理判決のために與へられて居る。彼女は物の性質や物の要求やその在るべき位置やを洞察し得る。女子の偉大なる職分は、讚美にある。女子は決して争闘に加はるべきではないがその争闘の褒賞は誤りなく女子が判定する。そして女子は此の職分と位置とによつて自身に對する危険や誘惑から保護せられて居るのである。

此の論は 1、男女の優劣を同一標準のもとに論ずるの不可と、男子が優秀にして女子が劣等なりとするの非なること、2、男女の特性と差異との内容を示したのである。

そして此の(一)(二)ともにシヨ氏の(三)に對して居る故、先づ此の三項から批評と論斷と初める。ラ氏の所論は、今日男女の天分、その本来の傾向、男女の價值、優劣等の如何を論ずる場合に、殆んど自明の理の如く、多くの人から常識的に正しい信念と認められてをるものである。又心理學生理學教育學の實驗的統計的研究も、男子は顯勢的消耗の極端的の個体で、女子は潛勢的保存的中庸的の個体なることを論證し以つて、男女の絶對的價値の相等平等なるを結論して衆人の信念の論證となつて居る。私もシヨ氏の所説に對してラ氏の説の勝利を悦ぶの正當なるを信するのである。そして私も女子としては、過去の或る時代において女子が第二的位置におかれ、賤しめられて居たことを思へば、正當に認められた嬉しさを感じ、尊き自己の天

分に對して今更ならねど感激の情にうたれ、重い責任を感じるのである。しかしもとより此の相等平等はどこまでも相等平等で、決して相同平等ではない。あらゆる情實を脚下に蹂躪して新運命を開拓するための一步を踏み出す時、萬斛の涙を腹の底に吞み込んで五体に漲る雄渾の氣に全自己を傾倒することは、男子の經驗體得すべき人生のシムボルであり、ふりかゝる因果の定め恩愛の雫に衣を霑ほしてそれをうち拂ひ得ぬ心よわさに、辛き行路やと歎く無量のやるせなさ、かくてもなほ己がはぐくむいとしき人に己れの身内の凡てを捧ぐる無上の安立と無限の歡喜とに消され消されて、行方のいづくはともあれ、確と踏み行く一步一步は女子の通過經營すべき人生のシムボルである。彼れが苦ならば是れも難、彼れが悲ならばこれも哀、彼れが喜ならば是れも悦、重ねていふ相等平等は相同平等にあらず、決してあゆる方面で女子が男子を優越凌駕しようとの企てに裏書するものではないことを。そして別に一言したいのは、シヨ



氏の(三)において暗示される「女は力の少い劣等の存在物である」といふことは、或意味において一般に信じられて居り、それには強固な根據のあることを認めねばならぬとのことである。それは此の「力」といふことの解釋であるが、今若し誰れなりが「力」といふ文字を見るか又は言葉や聞きかした場合に吾々は必ず吾々の祖先以來の遺傳的思想によつて先づ「生存上の競争の力」をおもふ。即所謂腕力、處世の技倆、職業に勤務する力、事業を計畫し經營し發展せざる力、學問を研究し、新しい事物を發明發見する力などを思ふ。これ等は先に所謂顯勢的の力である。而して此の顯勢力は、自然が兩性分業を思ひ付いた以來男性的個体に與へられて居り、人類に至つても依然として男子に占有されて居る。そして此の顯勢的の勢力は人類の生存に必要であり、その社會的生活の對天事業對敵事業に於いて第一に要求されるものであつて、太初競争の露骨であつた頃には、生活の資用を得ることから、他部族との戰鬥に勝つことにお

いて先づ此の力が必要で、此の力の多いものが尊重され、従つて優者となり、一時婚姻關係の進化の中途に於いてあらはれた婦女中心の社會も暫時にして消え失せて、當然の歸趨として男子中心の社會となり來り、優者の意志が社會的教權となつて、女子をして益々潛勢的ならしめ、男子をしていよく顯勢的ならしめた。そして今日の如き世の中でも同様に、自己發展も思ふやうに出來、自分も幸福で、家も富ませ、子孫も榮えさすには先づ此の顯勢的の力の行使によつて社會上の雄者とならねばならぬ。「思ふまゝ、」に行動したいと云ふのが、自然の因果律に縛られながら、なほも自己の自己たる特性を主張して己まぬ人間の欲求である以上、人間はその「思ふまゝ」のできる直接の原動力たる顯勢的の力を最も尊重するのは當然で、かゝる意味から女子は力の少い存在物と云はれるのは一理ありと云はねばならぬ。現代人のごとく自己發展の考が鮮かに腦裡を往來する人々には勿論、未來を開く自己の可能性を有る限り現示したい、又は

自己の内容——精神の内面的生活を——豊富にしたことの希望が意識的に強くあらはれて、女子は當然劣弱の存在物と云はれねばならぬ。古人にはそれが半意識的朦朧の間に考へられて居た迄のことである。けれども更に一步深く立入つて我々が無限に續く一線上に或る有限を劃して一時の意識体にすぎぬを知り、且つ吾人は所謂流動の實在に即して永劫の過去を傳承記憶しつゝ、現在を形づくり現在に位して無限の未來を開展し行く必然の運命を擔へるを念つたならば、その傳統創造の一面相として必要な保存蓄積の可能性をより多く備へた女子の個性を同様に價値ありと認めざるを得ないであらう。二百年の昔大ブリタインの島上グリーンノックの孤村に於いて、ゼームス、ワットの目の前で鐵瓶の蓋をおし上げて湯氣と立ちのぼつた一滴の水が、シベリア横斷四千哩の鐵路を現出して、日露戰爭も開かれたことを考へ得る今日の私どもは、どうしてもシヨ氏の(三)は一面の事實であつて全局の事實ではないと斷言せざるを得ないが、

如上の理由で一般の常識は女子を力の少い者とみとめるのも亦理ありと云はねばならぬ。けれども女子は常に絶對界に呼吸しつゝ、相對の世の自己の價値を認めて働かすべきものではあるまいか。すでに妻となり母となつてなほ教職に在る一人の友が嘗て記したものゝ中に「一間隔てた書齋の本箱を眺めやつては引きつけらるゝ想のふり棄て難く、さりとて此所(臺所)を此のまゝになしおくとも心苦しく、彼方此方を見やり見かへり、竈の前に佇む心地、げに知る人や知らむ。我れは坐して夕餉の仕度にかゝりぬ」とあつた。美はしい勝利である。かくて希望に輝く眼は牙えて竈に火焚く友の姿は私の心に刻まれて忘れられぬ。凡ての自己を否定して、相對の世に眞面目な努力をするのが何物にも換へられぬ女子の務の貴さではあるまいか。醒めたる女の眞劍の自覺の底は此所まで來なくてはならぬ。勿論強い意識の無く激しい心中の争闘なくこの境に入りて居るを望みもするが、母の胸に鬱積せる凡ての心情は、その子の上に絶大の強い力を以



で働く。此の意味から云うて、私は女の心の中に、此の切なるあはれさの積まれて行くことを悪しとは思はぬ、此の切なる想から、無限の發達と努力とが生れ出るのであるものを。

シヨ氏の(一)に對すべきラ氏の論はない。それ故これのみに就いて考へると、女子の生理的心理的特性から云うて、まさに所論の如しと肯定すべきであらう。但し此の穩かさは「山雨まさに至らんとして風の棲に満つる」がごときおだやかさではあるまいか。

シヨ氏の(二)については細論を避ける、唯々人性研究が「男子の獨身生活は殆んど何等の支障をも惹き起さぬか、女子の獨身生活は、生理上女子の身體精神に非常に悪い影響をもち來す。女子の單獨生活は多く女子の心身上に、何等かの缺陷を生せしむるが事實なること」を論證したのは、恐らくは此のシヨ氏の所論と關聯して考へらるべき事柄であらう。そして又一方には「婦人問題」に於いては上杉博士の述べられた、「女子の神經組織の纖弱鋭敏なるは、自ら深く

して密なる性種の感情を抱かしめ、色情を満たさんことを求むるよりも、寧ろこれ恐れしむる傾向ありて、美妙なる羞恥の心は純潔なる少女の皆有する所なり」といふのは、知言であるとおもふ旨を附記しておく。そして他日のもつと正確な研究を期して居る。ツルゲネーフの「スモオク」の、イリナ、ポウロウナの「皮肉なる頭腦」の振舞は、恐らくは多くの男子の婦人觀の一面をなせるものであらう。しかもそのタチャナも亦一部女子の眞實の代表者なることを私どもは主張せざるを得ない。私は自分が研究的態度に在る時は別として、實人生の實相に自分を打ち込んで居る時の態度としては、彼の篤實謹直な中村敬宇先生から、その臨終に「ながく手厚い世話になつた。おかげで生涯勉強ができました」との榮ある謝辭を得られた夫人高橋氏の端嚴な人生の行歩を、最も健全なものと讚美し、且つ其の圓滿な調和的幸福を欣悅するのである。そして此眞面目さを以て、此の如き問題はとり扱ふべきものと思惟して居る。

更に此の男女の差異を通じて一貫せる論斷は陰陽の考を女子男子に持すと云ふことである旨を明かにしたい。人生經營者としての女子は良妻賢母であらねばならぬ。しかし自由意志の信仰の牢として抜くべからざる今日、女子も亦男子と同種の教育をうくる機會ある今日、私共女子中に所謂「例外者」の出で、女子にも亦如

何なる可能性が與へられて居るものなるかを示すことがありたいと思ふ。(もとよりその人はかゝる外面的要求からでなしに、内心の充實のため)にその人の生涯を營むのであるが)社會は實にかゝる例外者のために同情と寛厚とを示す義務がある。男子の天才者に對すると同様に。

(未完)

國の名(十)

いついかにかゝるのどけきあきを見む

とざさぬきみのみよにあはでは

伊豆、伊賀、加賀、能登、安藝、土佐、讃岐、美濃、阿波、出羽。